

## 一村一志

「夢の芽生える文化」創造のプラットホーム  
「八雲志人館」は、将来に向けて持続可能な  
地域を創出することをめざして活動します。

ひとりの僧が、尾道市役所に助役を訪ねてきたのは、大正11年(1922年)6月のある日のこと。墨染の衣にあじろ笠、脚絆(きゃはん)にわらじ履きという出で立ちに、旅のほろりをうつすらまごった托鉢(たくはつ)は、この僧であった。

僧は言った。「百万円ばかり寄贈したいという篤志家がいるが、受けてくれるか」。

助役はのけぞった。流浪の乞食(こじき)僧が喜捨を乞うのではなく、逆に、百万円という途方もない額の寄付話をいきなり切り出したからだ。千円あれば家一軒が建った時代のことである。

正気の沙汰ではあるまい…助役は適当にあしらい、お引き取り願った。

『新修尾道市史(青木茂・著)に記載された挿話を多少脚色して引用しました。』

## 水の偉人③ 山口玄洞



イラスト 寺戸良信

後日談があります。

それでもなんとなく気になった助役はじめ役所の職員がよくよく調べてみると、托鉢僧は、静岡県浜松市にある臨濟宗方広寺派の管長・間宮英宗(えいじゅう)という高僧であること、そして、百万円寄



久山田貯水池

付するといふ篤志家は、尾道市出身で、大阪の豪商として知られる山口玄洞翁であることがわかったのです。「浄水に困っている尾道市民のために」という、玄洞の寄付にこめる想いも明らかになりました。

### 103万5千円 (現在の価値で数百億円) ボンと寄付

広島県尾道市は「坂の街」として知られ、北側の山と南側の海に挟まれて平地が少なく、山麓に住宅が密集しています。山側には適当な水源が少なく、海側は埋立地が多く、地下水は塩分を含んでいます。飲用水の不足は深刻な問題で、かつては水を売りに来る「水舟(みずぶね)」が日常的に見られる街でした。

大正10年(1921年)市議会が市内の久山田(ひさやまだ)を水源地とする上水道敷設案を議決、翌大正11年(1922年)3月に国から認可されました。しかし、計画された貯水池の下流域の人々から、農業用水が足りなくなるとの反対意見が上がり、交渉は難航します。尾道市役所に、托鉢僧が現れたのは、その交渉の最中のことでした。玄洞の寄付の話が本物であることを知り、水道敷設工事実現に向けての動きが加速します。

大正12年(1923年)1月上水道工事着工、大正14年(1925年)3月竣工、同年4月に上水が供給された。玄洞の寄付のおかげで、尾道市は「水の街」として発展することになった。玄洞の寄付は、尾道市の歴史に大きな足跡を残した。玄洞は、尾道市の発展に貢献した偉人として知られている。玄洞の寄付は、尾道市の歴史に大きな足跡を残した。玄洞は、尾道市の発展に貢献した偉人として知られている。

「戦場同様」の働きぶり、引退後は仏道三昧  
山口玄洞は、文久3年(1863年)現在の尾道市久保2丁目に生まれました。幼名は謙一郎。9歳の時、愛媛県の漢学塾に入塾しますが、明治10(1877)年15歳の時に父親が急死し、尾道に戻ります。学業をあきらめ、残された母と4人の姉妹の生活を支えるために、ほうきやバケツなどの生活雑貨を荷車に積んで行商を始めます。

努力奮闘と妻や優秀な幹部たちの支え、そして日清・日露の両戦争による洋反物の需要増という時代背景もあって、会社は飛躍的発展を遂げます。明治37年(1904年)9月には、多額納税者となったことから貴族院議員に選ばれ、2年間務めました。この間、多くの企業の重役としても活躍します。

輸出も増えたことから、大正元年(1912年)店舗を新築します。しかし、この業務拡大により、玄洞の仕事量は限界に達し、睡眠も満足にとれないような状態になりました。ついに健康を害し、大正6年(1917年)56歳で引退を決意。功績のあった上級役員に後事を託し、以降、京都の本邸に隠居し、念仏と禅の仏道三昧(さんまい)の暮らしに入ります。

「学」を活かした実践の道をまっとう  
玄洞は「大正・昭和の寄付金王」と呼ばれています。一代で築き上げた巨万の富を、惜しげもなく社会に還元したのです。現役時代には、学校関係、医学・医療関係に寄付を重ねました。その後の隠居生活では、仏教を篤く信仰し、寺院の修理や復興に多くの寄進を行いました。明治34年(1901年)の尾道市女子高等小学校新設資金1万円を皮切りに、記録に残るものだけでも147件の寄付・寄進をし、その総額は当時の金額にして700万8000円ともいわれられています。その中で、全国的にも最大規模となるのが、尾道市上水道敷設事業への103万5千円の資金提供でした。



「明明徳」の碑(千光寺公園・文学の小道)

また、玄洞の事業が飛躍するきっかけとなったエピソードにも、儒学の薫りがします。明治25年(1892年)毛織物のモスリン生地が英国から輸入され、爆発的に売れて、大問屋は大儲けしていました。しかし、山口(清助)商店などの中小問屋はなかなか生地を手でできません。そんなある日、モスリン生地を満載して来日した英国・イリス商社の船が遭難し、海水に浸った生地の買い手がつかないという事態になりました。困り果てているイリス商社に対し、玄洞は「気の毒である、全て自分が買い取る」と申し出たのです。

手間と費用をかけて何とか売り物にしたものの、儲けはまったくなりません。「馬鹿な事を」と商人たちの嘲笑の的となりました。しかし、大失敗と思われたこの件が、事業発展の一大転機となります。恩を感じたイリス商社が「モスリン生地を今後は山口商店にのみ販売する」と言ってきたのです。こうして、モスリン生地は山口商店の独占販売となり、一流問屋へと一気にのし上がったのでした。

これは「孟子」の中の「先義後利」「義」は人として当然あるべき道徳の意、「利」は利益のこと。道義を優先させ、利益を後回しにすること。という言葉の見本のような例ではないでしょうか。また、「気の毒である」という玄洞の心の動きこそが「明明徳」ともいえます。玄洞の仏道への帰依ということを考えれば、禅でいう「無功德」という言葉も浮かんできます。達磨大師の「見返りを求めて行ふ打算的善行は真の善行ではない。喜捨奉納も功德を求めて施すものではない」という教えです。儒学、念仏、禅の垣根を超える「開かれた精神」で「学」を活かし、実践の道をまっとうした山口玄洞翁は、昭和12年(1937年)に亡くなりました。享年74歳。「人間は努力次第で何事も成就しないことではない。怒れる竜の口中の玉でも容易にとることが出来る」。翁の遺した言葉です。墓は京都の大徳寺にあり、尾道の西國寺の墓にも分骨されています。昭和42年(1967年)、尾道市名誉市民に選ばれました。山口玄洞翁顕彰会などによって、1月の命日法要、彼岸法要が毎年営まれています。また、顕彰碑が建つ久山田貯水池の湖畔で、翁の遺徳をしのぶ「水神祭」が、大正14年(1925年)の竣工以来、毎年5月に行われています。

「ゆう科学通信」は皆様からのご意見、情報を礎に発信していきます。ご投稿はメール、ファクスでお願いいたします。